天台大師智顛の『円教』

小松賢寿

智顛は仏教を小乗と大乘に區別し、大乘の究極的立場を円教であるとしたことは周知の事柄である。従つて、智顛が「大乘」という概念によつて指示する思想内容は、そのまま円教であることがしばしばある。次の例もその使用例である。

小乗灰断^ス……十二部中不^レ明^二仏性^一。大乘説^ス如来是常、一切衆生皆有^二仏性^一。
(法華玄義六上)

ここでは円教である大乘では「仏性」を有りとする思想を展開していることが示されている。「仏性」とは言葉の通り、仏の性である。仏の性としての仏性とは、従つて「仏」がいかなる思想内容を包含しているかが解明されなければ、それを規定することができない。ともかくも、仏の性としての仏性を、一切衆生が有していること、それが円教の重要な思想的側面をなしているのである。

二

それでは円教に於ける仏とは何か、それが次の問題である。三蔵教、通教の思想的立場に於ける仏は次の如くである。

三蔵仏、父母生身、八十二^レ支^レ身、身灰智滅^ス畢竟不^レ生。通教仏、誓願^レ之身、化縁^若説、亦^レ頭^二灰断^一、滅已^不生。(同七下)

三蔵教、通教の仏は、共に灰身滅智して、空寂に帰する無常仏である。要するに無に帰する仏である。それに対して、別教と円教、ひ

いては究極的仏である円教の仏は次の如くである。

大槃涅槃常住不^レ変……円涅槃相也。(同上)
大經(涅槃經)以^レ常住^二為^レ宗。多^レ頭^二未來常住^一少^レ明^レ先成壽命。今經(法華經)正^レ明^二發迹顯本^一、無量壽命^レ為^レ宗、少^レ説^二未來常住^一。(同上)

ここでは、涅槃經に説かれる円教仏は、未來常住ということが強調されており、法華經に説かれる円教仏は、過去よりの無量壽命ということが強調されていると論述している。要するに、円教仏は、過去、現在、未來の三世を通じて常住であるということである。さて、この常住なる円教仏は、衆生を済度する仏陀である。

聖人慈悲誓願、願^レ持於行、如^レ物有^レ膠。任運^レ與^レ機相著。若^レ無^二誓願^一、雖^レ觀^二苦樂^一、不^レ能^二拔与^一。(同六上)

一切衆生を済度することを誓願し、その誓願力によつて今は完成者としての仏陀になつたのである。それゆえに、仏は一切衆生を任運に、済度することのできる完成者である。そして、その根本的態度が慈悲というエトスである。この慈悲によつて、一切衆生の済度は遂行される。その衆生との関わりが、感応である。

衆生皆有^二十界根性^一。熟^者先感、仏知^二成熟未成熟者^一、応^レ不失^レ時。(同六下)

仏は慈悲誓願力によつて、衆生の根性を知る。その衆生の側の関わり方が感であり、仏の対応の様が応といわれるのである。そして、この応の在り方が、時を失せず、また機の宜しきに適うことを示しているところである。

ところで、この仏の応の仕方であるが、仏は一切衆生、すなわち十方三世一切の衆生を済度するのである。それゆえに、仏は十方三

世のいたる所に自己の分身を顕すことができるのでなければならぬ。
無量仏悉是釈迦分身^ナ。

(同七下)

この分身という思想は、小乗にはないところである。

三世仏者悉是他仏、非我分身。比即三藏仏果相也。(同七上)

そして、この分身という思想は、次のような智顛の独特な思想へとまとめられていく。

歴別照^ニ十法界機、比別仏。一時照^ニ十法界機二比円仏。

すなわち、円教仏は一時に一切衆生を済度する仏陀である。ある時は地獄界、ある時は人界という歴別の済度は別仏である。それに対して、一時に、つまり同時に十界衆生を済度することができる仏、それが円仏である。このように、一時一切衆生を済度することができる根拠が分身の思想なのである。

更に、一時に十界に応同する円仏は、その応同の仕方について、次のように、湛然、任運などと言われる。

如^ク一月不^レ降、百水不^レ升、而隨^ニ河短長、任器^ノ規矩、無^レ前無^レ後、一時普現^ト……又如^ク明鏡表裏清澄、一像千像無^レ所簡択、不^レ須^ニ功力一任運像^ト似。

(同六上)

円仏が一時に十界衆生に応同するのに、功力をもちいず、いわば自然に成就することができるのとされるのである。それゆえに、この任運なる応用は、作意がないゆえに、無作の円仏とも称される。あるいは、はかりごとなくして応同が成就されるゆえに、無謀の善権とも言われる。また、その応同が特定の衆生に、特定の時期、つまりある縁に於いて成立するのではないゆえに、無縁の慈悲とも名付けられるのである。

天台大師智顛の『円教』(小松)

如来無謀善権。無方大用。(摩訶止観六下)

無縁慈悲者。即如来慈悲也。(同上)

無思、無念、無誰造作。故名無作。(法華玄義二下)

以上のように、円教が十界衆生を一時に照し、十界に一時に普現すること、このことを仏陀の側から表現する概念が具である。すなわち、仏陀は十界衆生を自己の済度すべきものとして具しているのである。十界を照すことと十界を具しているということは、全く同一の思想の言い換えにすぎない。

三

このように、円教の仏は十界を具している仏である。この仏の性を有しているのが衆生である。それゆえに衆生もまた、十界を具する性を有しているのである。智顛はそれを次のように表現する。

今但明^ニ凡心一念即皆具^ニ十法界^一。(法華玄義五下)

しかし、それはあくまで仏の性として、すなわち理の性として具しているのである。

衆生理性与^レ仏不二、是故不^レ異而衆生隱、如来顯、是故不^レ一。

(同六上)

理性としては具しても、隠れた理性である。この理性を顕現させるために、智顛は四種三昧、あるいは十境に對する十乘観法の実践体系を構成し、その修の必要を問いたのである。

ともあれ、十界の全ての衆生が理性として十界を具していること、それが十界互具ということである。

(大正大学総合仏教研究所研究員)